

松本清張の『点と線』におけるナラティブとテーマ

カレル大学 大学院生
アンナ・ヤルホフスカ

松本清張の「点と線」(1958)という作品は、「社会派」という探偵小説の運動の代表作として知られている。いわゆる「社会派」に属する作品の特徴は、人間味を持った探偵が登場し、リアリティーに富んだ捜査の描写を通して、社会における問題が主張されているということである。探偵小説という文学のジャンルは、ナラティブ、すなわちストーリーを主張している図式的なジャンルと思われるので、そういうジャンルに属する作品において、テーマとストーリーの関係は特に興味深い。「点と線」において、テーマはストーリーに不可欠な部分であるのか、その社会的なテーマはストーリーの進展に貢献しているのだろうか。本発表は、「点と線」という小説を、その小説の誕生した時代の社会的・歴史的な背景からではなく、特に現代の物語論を通じて、ナラティブの構造に着目し、分析していく。